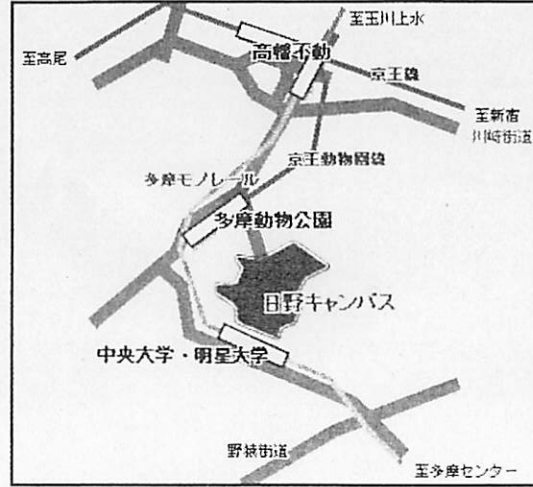


■アクセス MAP



【日野校までの路線案内】

- ①JR立川駅→(徒歩3分)→立川南駅→(16分)→中央大学・明星大学駅
- ②小田急・京王多摩センター駅→(徒歩3分)→多摩センター駅→(5分)→中央大学・明星大学駅
- ③京王高幡不動駅→(7分)→中央大学・明星大学駅

日本近世文学学会春季大会

平成二十四年度

- ・大会プログラム
- ・研究発表要旨

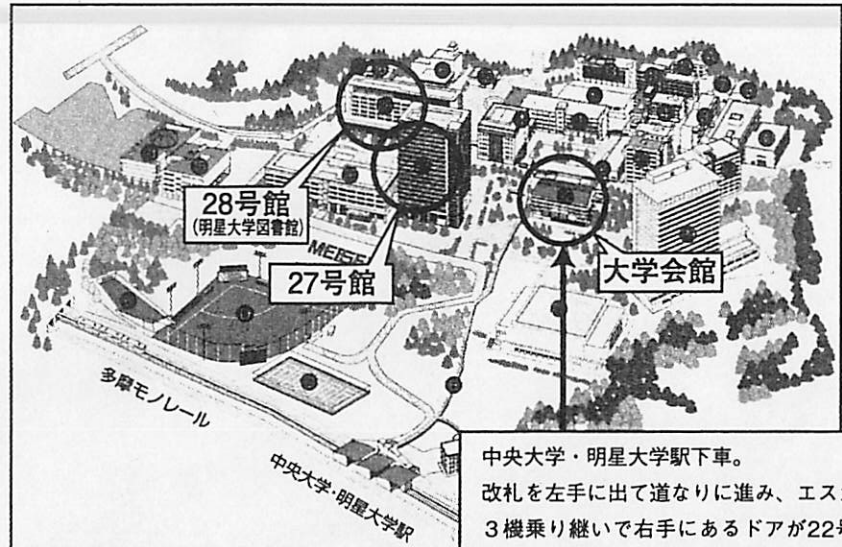
期日 六月二十三日(土)・二十四日(日)・二十五日(月)

会場 明星大学日野校

(二二号館(学生会館) 3階 会議室)

〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1

■CAMPUS MAP



中央大学・明星大学駅下車。
改札を左手に出て道なりに進み、エスカレータを3機乗り継いで右手にあるドアが22号館地下1階です。そこからエレベータまたは階段で3階までお上り下さい。

- 一、出欠の葉書を五月二十三日(水)必着でお出しく下さい。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。
- 一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(大阪大学文学研究科)へお申し出ください。
- 一、大会経費は、参加費千円、懇親会費七千円です。
- 一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇〇一七〇一九一四五七二九〇、口座名「日本近世文学学会春季明星大学大会」)で、五月三十日(水)までに振り込みをお願いします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。
- 一、大会二日目(六月二十四日)日曜日の昼食に弁当(千円)を用意いたしますので、ご希望の方は同封の振替用紙で送金ください。大会に不参加で、発表資料をご希望の方は、出欠葉書の当該欄に御記入の上、同封の振替用紙にて、資料請求代千円を払い込んでください。大会終了後、資料を郵送いたします。
- 一、三日目(六月二十五日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。
- 一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。
- 一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。
- 一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学学会明星大学大会事務局

明星大学人文学部日本文化学科 勝又基研究室

〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1

電話 〇四二一五九一六五〇三(直通)

メールアドレス info@icmnetsei-uac.jp

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。
さて、平成二十四年度春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成二十四年五月八日

日本近世文学会春季大会会場校代表 勝 又 基
日本近世文学会事務局代表 飯 倉 洋 一

〔事務局連絡先〕

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町一―五

大阪大学大学院文学研究科 飯倉研究室内

TEL・FAX 06-68850156-81

e-mail ikurata@letosaka-u.ac.jp

【会場】明星大学日野校 【行事】

第一日 六月二十三日(土)

委員会 会 (二二・五〇) 二四・二〇)

委員会会場 二八号館2階 二〇四号教室 (アカデミーホール)

大会受付 (二三・三〇)

開会時間 (二四・三〇)

研究発表会 (二四・四〇) 一六・二〇)

研究発表会場 二二号館 (大学会館) 3階 会議室

1 三言ならびに『今古奇観』の諸本と『英草紙』―庭鐘の粉本利用法をめぐって―

2 『近世説美少年録』『新局玉石童子訓』と『肉蒲団』

3 浅見綱斎と中国白話小説

日本近世文学会授賞式・総会 (二六・三〇) 一七・四五)

懇親会 (二八・〇〇) 二〇・〇〇)

懇親会場 二八号館2階 学生食堂

第二日 六月二十四日(日)

大会受付 (九・三〇)

研究発表会 午前の部 (一〇・〇〇) 二一・一五)

研究発表会場 二二号館 (大学会館) 3階 会議室

1 『名女情比』の作者について

2 『新可笑記』と『続太平記程首編』―巻五の二「見れば正銘にあらず」考―

3 嵐雪発句における子ども

4 三藐院近衛信尹筆「笑話書留」について

お茶の水女子大学(院)

大阪大学(院)

奈良女子大学(院)

京都女子大学

陳 隼 秀

仲 沙 織

服 部 温 子

大 谷 俊 太

昼 休 み (二二・一五) 一三・三〇)

編集委員会会場 二七号館10階 一〇〇一号教室

研究発表会 午後の部 (二三・三〇) 一五・四五)

研究発表会場 二二号館 (大学会館) 3階 会議室

1 馬琴読本と「再会の割符」―文化期を中心に―

2 「虬の珠」と「三種の神器」―『椿説弓張月』の神器思想―

3 「孝子顕彰」の読売と『御触書集覽 修身孝義鑑』

―『日本廿四孝子伝』等の出版を通して天保改革時の出版状況に及ぶ―

4 『春雨物語』の彼方へ

関西外国語大学(非) 久 岡 明 穂

同朋大学 服 部 仁

上智大学 木 越 治

閉 会 (一五・四五)

第三日 六月二十五日(月)

文学東地踏査 資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回り下さい。

図書 展 示 日本文化学科所蔵古典籍展

日時 二〇一二年六月二十二日(金) 六月二十四日(日)

場所 二八号館内 明星大学図書館 1階展示コーナー

『三言ならびに『今古奇観』の諸本と『英草紙』

—庭鐘の粉本利用法をめぐって—

上智大学院 丸井貴史

都賀庭鐘『英草紙』に収められる作品の大半は、中国短篇白話小説集「三言二拍」所収作品を粉本としており、そのうち四篇(第二・三・四・九篇)の粉本は「三言二拍」の選集である『今古奇観』にも収録されている。『英草紙』における「三言二拍」と『今古奇観』の使い分けについては、すでに『日本古典文学全集』頭注における中村幸彦氏の指摘が備わるが、本発表では、「三言」ならびに『今古奇観』の諸本調査を経て判明した事実に基づいてその再検討を行い、庭鐘の粉本利用法についての私見を提示したい。

『今古奇観』諸本の本文を、『英草紙』第三篇の原話である巻十九「俞伯牙捧琴謝知音」を対象に分類し、それらの表現を第三篇の本文と対照させたところ、同文堂本の本文のみが『英草紙』と一致する箇所のあることが確認された。同文堂本の現存数は他の刊本に比して格段に多く、あるいは流布本であったのかも知れない。以上の理由より、庭鐘の利用した『今古奇観』は同文堂本であった可能性が高い。これは『全集』頭注において利用された『今古奇観』とは異なる本文を有する刊本である。また、第三篇には同文堂本『今古奇観』のみならず『警世通言』をも利用した跡が見られるが、それは庭鐘が「三言」と『今古奇観』の校合を行っていたことを示している。その上で、それれがどのようなようにして使い分けられているかを検討することで、庭鐘の翻案手法の一端を明らかにしたい。

『近世説美少年録』『新局玉石童子訓』と『肉蒲団』

同志社大学院 三宅宏幸

馬琴の長編説本『近世説美少年録』は、外題を書肆に与えられ、執筆を請われた作品である。構想に悩んだ馬琴は、丁度知友に借りていた中国白話小説『橋机間評』の利用を決める。

だが、馬琴自身、「橋机」の方、『美少年録』の書名二は不都合」と書翰に書くように、「橋机間評」の登場人物には美少年的要素が少ない。「橋机間評」のほぼ忠実な翻案といわれる前半の中心人物、特に悪少年の朱之介(後の陶晴賢)を美少年として造型する際に、馬琴の工夫があったと考えられよう。

右の問題点をふまえ、本発表では、中国の艶情小説『肉蒲団』と『美少年録』及び続編『新局玉石童子訓』との関連を指摘する。李漁作『肉蒲団』は、一人の美青年が数々の好色的経験を筋で、宝永二年には和刻本(四巻二十四回四冊)が刊行され、馬琴も『肉蒲団』を閲していた。具体的な関連として、I朱之介や周辺人物の人物造型、II物語の趣向及び場面展開、III『美少年録』から『玉石童子訓』にかかる物語の構成(大枠)、IV『玉石童子訓』における「隠微」に着目する。『肉蒲団』との共通点や差異を確認し、『美少年録』『玉石童子訓』には様々なレベルで『肉蒲団』からの影響が見えることを述べる。

結果、主たる典拠『橋机間評』に看取できない『美少年録』の人物造型や趣向、物語構成が、『肉蒲団』を利用して描かれていることが明らかになる。その上で、『玉石童子訓』の「隠微」と『肉蒲団』の「主意」とが通することにも触れたい。

浅見綱齋と中国白話小説

明治大学 徳田 武

浅見綱齋の『常話雑記』(『隨筆百花苑』第五巻所収)は、宝永二年から六年にかけての談話筆記であるが、その内に中国白話小説に関する記載がある。一は、「蔡小姐忍辱報仇」(『醒世恒言』第三十六卷、『今古奇観』第二十六卷)の荒筋を語ったものだと認められる。そうとすれば、これは狄生徂徠や伊藤東涯と並ぶ、非常に早い白話小説への言及である。そして、その読み取り方には、如何にも蘭齋学者らしい名分論に基づくものが見出される。

また、この『常話雑記』の中で、綱齋は、たびたび『水滸伝』に言及している。それらは、珍しい語彙や白話語彙に就いてのものが多く、言っていることは正鵠を射ている。そして、これらの言及も、徂徠や東涯に勝るとも劣らない、早い時期でのものである。『三國演義』に関する言及さえある。

しかも、そうした言及は、単に早いのみならず、固い道德学である蘭齋学に従事する者が、本来、まともに相手にすべきではない神史小説を語っているものとして驚かされる底のものなのである。

綱齋がこのように中国白話小説を読むのは、勿論、慰藉を求めてである。が、同時に徂徠や東涯、中んづく同じ京都で講学している東涯の読書の新しさや博さをも意識しての事であったろう。

『名女情比』の作者について

お茶の水女子大学(院) 陳 翠 秀

『名女情比』(五巻五冊・延宝九年正月刊)は「情」をテーマとした作品である。巻四までは恋歌を中心とした高貴な女性の話であるが、巻五からは近世遊女の話を掲出し、計三十四話の話を収めている。先に発表者は拙論(『名女情比』考)『国文』百十五号・二〇一)において、『名女情比』は『伊勢物語』及び『關疑抄』を受容していることを確認している。今回は作者の問題の解明を図りたい。

『名女情比』の序文末に「落葉堂の好色軒」とあるが、誰のことなのか、定かではない。朝倉治彦氏は『名女情比』と『好色袖鑑』が同一作者による可能性を指摘された(未刊国文資料『未刊仮名草子集研究(一)』解説)、『好色袖鑑』(二巻二冊・天和二年二月刊)は、問答体を借りて恋愛道を教訓的に語った作品である。その作者について、吉田幸一氏は吉田半兵衛(江戸初期の京都浮世絵師・生没年不詳)ではないかと推測されている(近世文芸資料第十『好色物草子集』解説)。

そうした先行研究を受け、本発表では、まず具体的に本文などを比較して、『名女情比』と『好色袖鑑』とが同一作者の手によることを検証したい。さらに、坂内山雲子作『伊勢物語』の注釈書である『頭書新抄伊勢物語よみくせ付』(大本二冊・延宝二年五月刊)を視野に入れ、『名女情比』と『好色袖鑑』の関連性について触れてみたい。

『新可笑記』と『統太平記狸首編』

—巻五の二「見れば正銘にあらず」考—

大阪大学(院) 仲 沙 織

西鶴浮世草子において『新可笑記』(元禄元年十一月刊)は評価の低い作品であるが、特に巻五の二「見れば正銘にあらず」は低調とされ、言及されることの少ない章段である。その原因は家老二人の確執を描く前半部と、浪人と目利き者による刀の真贋をめぐる刃傷事件や十年後の目利き者の殺害を描く後半部との関連が一見希薄であり、一つの章段としてのまとまりが見られないことにあると思われる。

本発表は巻五の二の再評価を目的とする。巻五の二の構成に關する問題を考えるにあたっては、赤松満祐による嘉吉の乱との関連が重要な手掛かりとなる。すでに、播州赤松家という舞台設定や結末の主殺しが言及されているが、西鶴が参照したとされる具体的な資料の指摘はなされてこなかった。

発表者は巻五の二の素材として伊南芳通『統太平記狸首編』を提示する。そして巻五の二と『統太平記狸首編』との語句や展開の一致、従来顧みられてこなかった家老二人の設定への利用について指摘する。

また、巻五の二の前半部と後半部を繋ぐ重要な要素として「油断」が挙げられる。「油断」は『統太平記狸首編』にも描かれているが、巻五の二では「油断」する人物の設定やその内容に工夫が為されている。そこを起点に、巻五の二の創作意識を明らかにする。

嵐雪発句における子ども

奈良女子大学(院) 服部 温子

『炭俵』所収の嵐雪発句に「竹の子や児の齒ぐきのうつくしき」がある。『源氏物語』横笛で幼い蕉が「御はの生ひ出づるに食ひ当てむとて、たかうなをつと握り持ちて、しづくもよよと食ひぬらしたまへば……」(『新編日本古典文学全集』)という場面をふまえたものと言われているが、実は芭蕉にも同じ場面をふまえ詠まれた発句「たかうなや琴もよよの篠の露」(『続連珠』)がある。両者は共に笛のもつ生命力やみずみずしさを詠んだものであるが、それを子どものもので表現した嵐雪の方が、琴で表現した芭蕉句よりも、効果的に表現できていると言えるのではないか。つまり、ここでの子どもは、単なる愛らしい存在ではなく、笛のもつ生命力やみずみずしさを際立たせるという、一句の演出効果を高めるものとしても機能しているのである。

これ以外にも、嵐雪発句には「出替や幼」に物あはれ(『猿蓑』)や「手習の師を車座に花の児」(『雑談集』)など、子どもという素材を詠み込むことで一句の演出効果を高めている例が多いように思われる。

そこで本発表では、嵐雪発句のうち子どもを詠んだ句を取り上げ、子どもという素材が発句の中でどのように詠まれているか、芭蕉や其角らの発句における子どもと比較しながら考察し、嵐雪俳諧の特色を明らかにしたい。

三藐院近衛信尹筆「笑話書留」について

京都女子大学 大谷 俊 太

陽明文庫所蔵一般文書中の「笑話書留」(仮称)を紹介する。本書は、墨付四丁の仮綴の写本一冊(遊紙四十一丁。紙背は『六百番歌合』)で、十二話の笑話書き留められたに過ぎないものであるが、筆者が近衛信尹(号三藐院、一五六五年生—一六一四年没)と明らかであること、書写年次が慶長頃と推定され、笑話集としては比較的古い成立であることなど、注目に値する資料と思われる。さらに、本書の話には、大村由己・細巴・道澄(聖護院門跡・信尹の叔父)など、信尹と直接関わりのある人物が登場する。このことは、本書が書承による書留ではなく、笑話が創作もしくは改編された、笑話誕生の現場における書留であることを示している。

かつて野間光辰氏は信尹周辺で仮名草子『犬枕』が創作された可能性を示された(『仮名草子の作者に関する一考察』、『近世作家伝』再録)が、同じことが笑話においても確認されたことになる。所収笑話の検討を通して、その当代性・洗練性を指摘するとともに、近世初期堂上文壇における他資料も見渡すことで、笑話と堂上文学との関わりについて言及したい。

馬琴読本と「再会の割符」——文化期を中心に——

関西大学(非) 中尾 和 昇

『松染情史秋七草』に「再会の割符」とあるように、馬琴は読本作品において、強い絆で結ばれた男女や親子が別離のちに再会を果たす際、証拠の品を提示するという趣向をしばしば用いた。

石川秀巳氏は、この趣向が(巷談もの)に多くみられることを指摘し、「秩序の回復」を促すものであると断定された(『巷談物』の構造—馬琴読本と世話浄瑠璃—『日本文芸の潮流』おうふう、一九九四年一月)。しかし、石川論文ではこの趣向の利用を(巷談もの)に限定しながらも、概説的な叙述に止まっておき、具体的な検証はなされていない。そこで本発表では、文化期の馬琴読本における「再会の割符」の機能を考察し、馬琴読本の様式的把握における私見を提示したい。

管見の限りでは、『月水奇縁』から『糸桜春蝶奇縁』までの十五作品に「再会の割符」が認められるが、その利用態度は様ではない。馬琴は当初、事前に証拠の品の存在に言及せず、再会する場面において、唐突にそれを提示していた。ところが、『四天王剣盜異録』以降は、別離の場面を設け、再会時の感動を際立たせることに成功する。そして、『三七全伝南柯夢』に至っては、抒情性を演出するだけでなく、緊迫する事態を円満に解決させ、物語を円満へと導く。このように、「再会の割符」の系譜を辿ることで、馬琴読本における個別の趣向が、小説的機能を有するまでの過程が明らかになるのである。

「虬の珠」と「三種の神器」

—「椿説弓張月」の神器思想—

関西外国語大学(非) 久岡明穂

『椿説弓張月』では、主人公為朝が流れ着いた琉球國の「虬の珠」が紛失する危機が描かれる。「虬の珠」は、作中で日本の「三種の神器」と同じ意味を持つとされ、馬琴が力を入れて描いていることから重要な意味を持つと考えられる。

馬琴の時代には、すでに、一方では『海國兵談』の刊行などで対外意識が高まり、他方では「神器」に対する議論が注目されていた。国学では本居宣長が『古事記伝』において師の真淵説を批判し、また、水戸彰考館では神器の保有と皇位の正統が論じられていた。

当時の時代認識や「神器」に対する議論を踏まえて、改めて『椿説弓張月』を検討した。馬琴は、「虬の珠」が失われる過程を描くことで、「神器」が国そのものをあらわし、「神器」が正常に継承されることが國家の安泰であることを示している。「神器」の紛失は國の乱れであるが、その回復により自覚された強い皇位の継承が実現することを描いている。

作中の琉球王朝は、神器なき皇位継承を乗り越えて継統された日本の歴史の縮図のように描かれている。馬琴は、「神器」の概念を作品において具体化することにより、「神器」に象徴される國とそれを守る者としての皇位の意義を示している。『椿説弓張月』では、神器の継承を通して皇位と國の意味が描かれ、それを受けての武士のありかたが為朝を通して描かれている。

『春雨物語』の彼方へ

上智大学 木越 治

『春雨物語』「天津処女」後半における宗貞出家譚は『大和物語』を典拠しているが、そこに出る和歌は、秋成自身の校訂版本とは異なる。というよりも、現在知られているどの本文とも一致しない。また、『春雨物語』と時期的にも内容的にも深い関係を持つ「駕央行」に引かれた漢字表記による万葉集本文は、実は秋成自身の語源解釈に基づく創作的表記というべきものである。こういう例を考えていくと、この時期の秋成は、典拠を手元に置かず記憶で書いた、というだけでなく、もう少し進んだところで、新しい古典本文を作り上げようとしていたのではないかと思えてくる。「天津処女」の宗貞説話と『大和物語』の当該章段を比較したとき、秋成の方に軍配を上げたいと思うのは、たぶん身びいきだけではないはずである。

こうした新しい本文創作への意識を根底に置いて書かれた『春雨物語』前半の「歴史小説」群に通底しているのは、「花にのみうつり染ゆる」(「天津処女」)時代への違和感と、その結果としてもたらされた堂上歌学衰退状況の確認である。そこから反転して、万葉時代への憧憬を根底においた秋成的現在の肯定に至るプロセスが後半の「社会小説」を貫くテーマであろう。以上のような観点に立って、『春雨物語』全体を貫くものがないか、できるだけ具体的な例に基づいて述べてゆきたいと思う。

「孝子顕彰」の読売と『御触書集覽 修身孝義鑑』

—「日本廿四孝子伝」等の出版を通して—

天保改革時の出版状況に及ぶ—

同朋大学 服部 仁

近時、中野三敏氏が、享保七寅年の出版に関する御触書は取締令ではないとされたのは卓見である。しかし天保改革時の出版取締令は、正に取締令であった。その実相の一端を見ていく。ここに間に合わせの表紙に朱の打付書きで「孝子顕彰」と記し、孝子孝女の読売ふうの記事二十話(短い話は半紙一丁、長いもので三丁)を綴じ合わせたものがある。同種の「賞孝記事」(仮題)という綴じ合わせが、西尾市岩瀬文庫にも蔵されている(勝又基氏御教示)。こちらも二十話で、十七話は「孝子顕彰」と重複している。内容は、その大部分が、天保十二、三年に、江戸または代官所支配地の孝行者を奉行所が褒賞したというものである。こうした記事が事実であるのかどうかということについて、『御触書集覽 修身孝義鑑』(中本)に即くことによつて半数ほどの確認ができた。

ところで、この『御触書集覽 修身孝義鑑』(岡村屋庄助刊)という本には、刊年は記されていないが、記載内容からして天保十四年正月以降の刊行と思われる。さらにこの天保十四年に出版された読本は、島定賢作『日本廿四孝子伝』五巻五冊ほか数点(『日本小説年表』)だけである。天保改革の出版取締のため、この時期、書肆は孝子ものぐらしいしか出版できなかったのである。ちなみに国芳の「二十四孝童子鑑」のシリーズも、まさにこの時に、取締令を契機として出版されたのである。